



中秋の名月（十五夜）の10月3日に開催した「八代家でお月見」。たくさんのご来場、どうもありがとうございました。

（内海）

第1部は、親子対象の「お月見だんごを作ろう」。たくさんのお小学生とそのご家族が参加してくれました。

団子作りは、米粉とお湯をあわせて捏ねて、団子の種を作るところからスタートしました。それを八代家にあるカマドで茹で上げて、搗いたものを小さくちぎり、子ども達が丸めていきます。ちょっと熱いけれど、みんな頑張りました。

できあがった団子を三方に載せ、ススキと秋の草花を生け、籠には里芋・さつまいも・栗を入れ、お月見の飾りを八代家の縁側に作りました。十五夜は、里芋などの秋の収穫物を飾るので、別名「芋名月」とも呼ばれます。子ども達も、できたての団子を、きなこをまぶしたものと、しょうゆをつけて囲炉裏の火で焼いたものの2種類の味付けで、早速いただきました。

第2部は、「お月見コンサート」。篠笛と朗読のコンサートを、たくさんの方にお楽しみいただきました。篠笛奏者は、井出聖子さんと兼平和明さん。朗読者は、柴山裕子さんと湯浅尚弥さん。篠笛の演奏曲も朗読作品も、「月」にまつわる作品を多く選んでいただきました。

コンサートは、「竹の踊り」という篠笛の曲の演奏で始まりました。篠笛の音と、八代家住宅の雰囲気美しく溶けあい、素敵なハーモニーを聴かせて下さいました。プログラム終盤の「月の砂漠」はお客様も一緒に歌ったのですが、母屋いっばいに、篠笛の音と歌声が響きわたりました。

朗読は、二つの小品の他に、お二人が交代して樋口一葉の『十三夜』を読みました。お客様は、お二人の朗読に引き込まれ、物語の世界に浸っていらっしやいました。

かやぶんかわら版42号にも書きましたが、「十五夜」と違い、日本独自の風習として「十三夜」というものがあります。「十五夜」の月だけを見ることを「片見月」と呼び、昔から嫌がられ、必ず旧暦9月13日の「十三夜」の月も見ました。「十五夜」の「芋名月」に対して、「十三夜」には栗や豆をお供えすることが多いため、「栗名月」や「豆名月」と呼ばれます。

曇り空だったので、月を見ることは出来ないかと思っていたのですが、コンサート終演後、空を見上げるときれいな十五夜の月が出ていました。

八代家住宅でのお月見、皆さんに楽しんでいただけたようで、良かったです。

